幸せの環

沖縄県立開邦高等学校　一年　宮城（みやぎ）　莉子（りこ）

「お金のことは気にしないで、自分のやりたいことをやってね。」

これは、私の両親の口癖だ。幼少期の私は、この言葉を信じきっていた。自分はこれからやりたいことを何でも自由にできるのだと、信じて疑わなかった。しかし、高校生になった今、私は様々な現実を知っている。三姉妹全員が大学を卒業するのにかかる費用も、両親が夜中に家計のやりくりに悩んでいることも、あの口癖が私に気をつかわせないための優しさだったことも。それを知ると、後に二人の大学受験を控える我が家で、長女である私が高額の塾や予備校に通わせてもらうことを申し訳なく感じるようになった。かといって、一切塾なしで志望する大学に合格できるかと言われれば不安が残るし、浪人すればさらに家計に負担をかけてしまう。私の葛藤は深まるばかりだった。

そんな時に見つけたのが、「琉大カガク院」という、琉球大学が実施する科学教育プログラムだった。私が目指す医者という職業に求められる、研究基礎力や思考力を身につけられる内容に惹かれ、応募を決めた。その時決定打となったのは、他の事業と違って、最大二年のカガク院が完全無料だったことだ。なぜ無料でこのような充実した教育を受けられるのか疑問に思いながら、私は応募要項を読んでいた。

私の疑問が解決したのは、カガク院の選考に通り迎えた開講式の日だった。開講式で、琉球大学の教授の方が言った言葉。

「琉大カガク院は税金によって実施されていますので、皆さん頑張ってくださいね。」

私が、無料で発展的な教育を受けられる理由。それは、「税金」だったのだ。

令和五年度の国の歳出のうち、約五兆円が「文教及び科学振興費」として、つまり教育のために使われている。経済状況に関わらず、将来を担う子どもの学びが社会全体に支えられている。実際私も、税金のおかげで罪悪感なく学ぶことができている。義務教育をはじめとして、就学支援金制度やカガク院のような人材育成事業、海外留学支援など、幅広い学びの選択肢が用意されている。「未来を担う若者」として応援され、学ぶ楽しさを享受できることの幸せを噛みしめた。

両親の口癖通り、私は今までやりたいことを自由にさせてもらってきた。それが可能だったのは、両親の努力と愛情に加えて、「税金」という優しさがあったからだと気づいた。

税金で学びを享受できた私たちが、次は大人になって学びを支える側になる。そのような「幸せの環」の中に生きられることにとても感謝している。私もその環を作る一人としての誇りを持って、成人となる数年度、学びを支えるために税金を納めたい。そうして幸せの環が続けば、私がいつか親になった時、冒頭の言葉を子供に投げかけられるような素晴らしい世界が続いているだろう。